

## 高等教育院教員のご紹介

令和5年度より、データサイエンス学部から  
高等教育院にご協力いただくこととなりました！

### 山本 祐輔 准教授

2023年4月に本学データサイエンス学部の准教授として着任しました山本祐輔と申します。普段はデータサイエンス学部の教員として教育に従事しつつ、情報検索・情報推薦技術、人と情報技術の相互作用に関する研究を行っています。これらの活動に加えて、このたび高等教育院を兼担することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。



私に期待されていることは、本学全体における情報教育の企画・運営かと思えます。中でも、特に期待されているのは「データサイエンス・AI教育」です。故に、本年度新設されたデータサイエンス学部（そして高等教育院運営委員でもある私）には、大きな期待が寄せられています。

さて、データサイエンス・AI教育においては大事な要素が主に2つあると考えます。1つは、数理学や計算機の力を使ってデータから価値を引き出す技術です。一昔前は、データあるいはデータ分析は「（人があらかじめ考えた）仮説を立証するための道具」に過ぎませんでした。ところが、大規模なデータの収集・集積・分析が可能になった今日、データから仮説やパターンを発見したり、データから発見したパターンに従って動作する情報サービス（いわゆるAIサービス）を作ることができるようになりました。これらを実現するための数理学、計算機科学の本質は抽象化にあるため、修得しさえすればあらゆる分野で適応することが可能です。実際、大規模なデータ分析に基づく知見の発見、サービス開発が医療、創薬、工学、農業、人文学、教育、デザインなど幅広い分野で行われつつあります。こういった背景もあり、全国の大学でデータサイエンス・AI教育の導入が急速に進みつつあります。

データサイエンス・AI教育におけるもう1つの大事な要素が、情報技術と人間との関係性、言い換えると「データサイエンス・AI技術」との付き合い方です。情報技術の進歩により、わたしたちの生活を一変するような驚くべきサービスが現れています。一方で、無批判な情報技術の利用は、人間の認知能力・社会性の低下を招いたり、タコツボ化、社会の分断といった問題を引き起こしつつあります。その最たる例のひとつがChatGPTです。どんな質問に対しても流ちょうな言葉で即座に答えを返してくれるChatGPT。うまく使えば生産性は向上しますし、創造的活動のヒントを得られます。他方、何も考えずに使えば、誤った情報を鵜呑みにしてしまう可能性もあります。そしてなにより、高等教育という文脈において極めて重要な「自分の頭で考える機会」すら失いかねません。

道具を使うのか、道具に使われるのかは大きな違いです。データを燃料とした価値の自動発見、言うなれば「判断の自動化」を志向する現代のデータサイエンスやAI技術は、社会課題解決のための有望なアプローチの1つです。しかし、接し方によってはディストピアが待っています。エーアイ技術に過度な期待が集まっている今日、データサイエンス・AI技術とのちょうどよい付き合い方について学ぶことは、ツールとしての諸技術を学ぶこと以上に重要であると思えます。



教育分野での生成AIの活用について、本学では教育学や生成AIに精通した教員を中心にタスクフォースを立ち上げ、検討を行ってまいりました。この度「生成AI利活用ガイドライン（学生用Ver.1.0）」が完成し、学生向けに周知を行いました。タスクフォースの一員である山田先生に、ガイドライン作成のご報告をいただきます。

## 生成AI利活用ガイドライン（学生用Ver.1.0）について

高等教育院 教授 山田 勉

生成AIは、テキスト、画像、音声、動画などのコンテンツを生成する人工知能技術です。この技術は急速に進歩しており、多方面での応用が期待されています。しかし、AIが生成したコンテンツの真偽性や著作権問題、情報漏洩の危険性などの課題も明らかになっています。

そこで本学では、責任ある倫理的な使用を保証する一方、生成AIのクリエイティブな利用を促進するためのガイドラインを作成しました。このガイドラインを参考にして、生成AIの利活用を学生が正しく学ぶようご指導いただけると幸いです。また、実際に使ってみることをぜひ奨励してください。



生成AIを使い始めると、学生は様々な疑問を持つでしょう。ChatGPTが生成した文章は引用の仕方も統一されていませんが、オーサーシップは著作権とは別に考慮しなければなりません。とすると、ChatGPTで記述したプログラミングコードは、実際にそのまま製品開発に活用できるのでしょうか。あるいは、画像を生成するStable Diffusionでは、入力テキストをほんの少し変更しても画像全体が変わってしまいます。さらに、テキストでは表現しにくいスタイルもあります。とはいえ、分野によってはコピーからクリエイターとしての仕事が始まる時代にもなっているかもしれません。

このように、学生が直面する課題は様々ですが、それぞれの技術的な課題は、研究の進捗に伴い改善されつつあります。生成結果にウェブ検索による根拠を示すBing AI Chat (Bing Copilot)などは、その一例です。このため、本学では生成AIに関する多様かつ有効な活用について引き続き検討を続け、本ガイドラインは随時改訂を行う予定です。

最後に、生成AIに関する教育研究フォーラムが近々開催されます。このフォーラムでは、学生にも参加を求め、生成AIの利活用方法について情報交換が行われます。積極的なご参加をお待ちしております。

## 生成AI利活用ガイドライン（学生用Ver.1.0）はこちら



<https://www.nagoya-cu.ac.jp/education/guide/ceremony-44274/>

(本学ウェブサイト：ホーム > 教育・学生生活 > 教務案内・教養教育・専門教育  
> 生成AI (ChatGPT等) の利活用について)

## 教育改革フォーラムを開催します！

【日 時】令和5年10月24日(火)16時15分から17時30分

【開催方法】オンライン開催(Zoom)

【内 容】生成AIで本学の教育はどのように変わるのか、実際の授業での活用事例をふまえ、生成AIの可能性や課題、本学の利活用ガイドラインについて意見を交わします。

※お申込み方法は別途ご案内します。(お問合せは教務企画室まで)

